
パロイディア・パラフィリア

paro

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

パロイディア・パラフィリア

【Nコード】

N30000

【作者名】

paro

【あらすじ】

私は物心ついた時から薔薇の香りが好きだった。小学校に上がった頃、私はよく母の薔薇の香りを嗅いでいた。それは私にとって欠かすことのできない日課のようなもので、三度の飯よりも大事だと思われることもあった・・・

第一節　私の原体験

君は園のどの樹からでも好きなように食べてよろしい。しかし善悪の知恵の樹からは食べてはならない。その樹から食べるときは、君は死なねばならないのだ。

旧約聖書　創世記　第二章

私は物心ついた時から薔薇の香りが好きだった。小学校に上がった頃、私はよく母の薔薇の香りを嗅いでいた。それは私にとって欠かすことのできない日課のようなもので、三度の飯よりも大事だと思われることもあった。

母の薔薇の、燦爛たる花びらとその奥に潜んだ実は、今になって思い起こすと、香りではなくて臭いと表現したほうが正しいようである。あの匂いは、決して食欲をそそるような類のものではなく、むしろこの世のありとあらゆる欲を削ぎ落してしまうような、独占的な臭いであった。

もちろん、こんな性癖は子供心にも口外してはならないと感づいて

いて、学校ではその話題は出さなかった。だから私は学校から帰ると、禁忌をいとも簡単に破る快感の下に、真つ先に母に薔薇をせがんだ。母は特段の反応もせず、いつもさり気なく薔薇をひらいてくれた。落ちついた私はそうしてすぐに、友達と遊びに行くのだった。

しかし私と母、そして私と母の薔薇との関係はそう長くは続かなかった。母の薔薇の、臭いの記憶は小学五年の蒸し暑い夏のある一日で途絶えている。なぜならば、母はそれから間もなく、腸チフスで死んだからである。

子供の頃の私は、このような独特な性癖によつて、おおよその生活を説明できるとも言えた。そして今はもう三十を過ぎたが、その癖は母が死んでからも、曲がりなりにも残っていた。それは、私が初めて女を知った十七の時から、母の代わりを血の繋がりのない赤の他人の女に索めたことで再び表面化した。ただし私も色好みの人間であつたから、あまたの女との情事によつて、その性癖は様々な意味をもつようになった。私は普通に、女の艶かしく柔らかい体をこよなくむさぼつたが、しかしその薔薇を目の前しては興奮と同時に一種の安寧を感じるのだった。あるいは、興奮や快感だけを求めるためだけに女をむさぼる時もあつたし、また安寧の為だけに、あたかも母への憧憬を堅持する為だけに薔薇を求める時もあった。よつて私にとつて異性との肉体的なまぐわいには、興奮や快感のほか、一種の独特なノスタルジーがあつた。とはいえやはり幼いころ嗅いでいた母の臭いに叶うものなど一つもなかつた。

母の薔薇と母でない女のそれには截然たる差違があること・・・
・その差違がいつしか好色な私の心に澱となつて深く沈んでいた。母の薔薇を失つた私は、そういう訳で果たせぬ願望を抱いて暮らしてきたのである。しかしあれは丁度二年まえの雪の降る大寒の日だったろうか。私には思つてもいない好機が訪れたのである。

*

その日私は、建設現場での仕事を終えて、職場の後輩である藤田と賑やかな渋谷の街をぶらぶらと歩いていた。私たちは現場作業着そのままに、上はドカジャンに下はニッカポッカという格好で、堂々と肩で風を切っていた。大粒の雪が重く降っていたが、それも構いなしのように若者たちが街に溢れていた。藤田とこうして渋谷を歩くのはお決まりのことで、彼はいつもいやな顔一つせずに私についてきてくれる。とくに明確な目的があるという訳ではない。気が向いたら飯を食べたりスロットをしたり、景気のいい時にはナンパなどをするのである。

私は肩にかかる大粒の雪を振り落とすために右手で軽く肩を払おうとした。すると丁度私の左肩の視線の先にいた藤田が、いつもと違う冴えない顔で俯いているのが見えたのである。心配になった私は、

「おい、藤田、どうしたんだ。そんなつまらないような顔して？さては今日の仕事きつかったか？あれだけの量の建築資材を手で運べっていうんだから。確かにあれは人間の仕事じゃないよな」

と言った。藤田はそれでも何も答えないで下を向いていた。

「おい、飯でも食うか、今日は俺がおごつてあげるぞ、特別だぞ」その言葉に藤田はわずかに気を取り直したようので、

「マジですか、うれしいです」と言った。

しかし藤田はまだどこか冴えない。それを看取った私はさらにこう言った。

「おい、藤田、ナンパでもすつか？」

「マジですか、そっちのほうがいいっすね、やりましょうよ」

「でもゲテ物限定だぞ」

「いいですよ、そのの方が楽しいじゃないですか」

藤田の曇った表情はそれで一気に晴れた。藤田はなぜだか私がゲテ物を欲しようとすると感じに堪えたような表情をするのだった。その傾きはいつものことで私は知悉していたのだが、しかしなぜそう

なるのかは殆ど謎である。とはいえ推測できることがあるとすればこうだった。藤田は私に尊敬の念を抱いている。それも一風変わった尊敬の仕方だ、私がゲテ物でも何でも食べられる大喰らいであることに、ある種の全知全能を觀ている。あるいは私がさながらすべての生きとし生けるものに対して繊細かつ大胆な愛を注げる神的な存在であるかのように。

こうして私たちは渋谷の街を徘徊し始めた。私は藤田の背後に隠れて、そこから覗きこむように獲物を探した。ナンパをする時の、私の定石である。私にとってこの姿勢は、さながら自分を狩人に見立てることによつて獲物に対する執着心を植え付けるために必須だった。藤田の背後から覗きこんで見える渋谷の街は、この時もはや狩人になりきっていた私にしてみると、あたかも良質なゲテ物の、恰好な狩猟場のように思われた。しかし私は、はやる気持ちを抑えて、構えていた猟銃を静かに下ろした。取り留めのない狩猟はきまつて徒爾に終わるからである。

私になかなか動かないでいると藤田が、

「あの女どうですか」

と遠い先を指差した。私は藤田が指し示す先を見てみたが、そこには煩わしいような群衆しかなかった。

「もしかしてあの集団か？あんな集団狙つてどうすんだよ」

と私が言うのと藤田は鼻にかけたような口調で、

「違いますよ、あいつらのもつと先ですよ」

と言った。私には見えなかった。私の視線には蟠る群衆と、それすらも遮るしめやかな降雪しかないのだ。ひよつとすると藤田の目は千里眼かもしれない。私には見えない先まで、藤田は見えてしまふというのか？この時の私は、藤田の探索能力に少し妬いていたかもしれない。とは言え良質なゲテ物がいればそれにこしたことはないのだ。私は藤田とともにその先へと行ってみた。

そこには確かに二人組の若い女がいたが、まったく私の好みに適

わなかつた。純粹にゲテ物ではなかつたのだ。

「おい、藤田、あんな女だめだ。全然ゲテ物じゃないじゃないか」
「そうですかね、伊藤さん好きそうな女だと思っただけですけど」

その後も藤田は私が好きそうな女を探しだした。しかし見てみるとすべてだめだった。私はしびれを切らして、藤田にある話を持ちかけた。彼を試してみようとしたのである。

「おい、藤田、ところでお前焼肉食うならどこで食べたい？」

「いきなりなんですか、それはもちろん叙々苑じゃないですか、ただお金があればの話ですけどね」

「だからお前はだめなんだ。焼肉屋なら安楽亭だろ」

「えっ、安楽亭ですか？あんな硬い肉ばかり置いているところが？」

「当り前じゃないか、安楽亭のあのゴムみたいに硬い肉質がいいんじゃないか。じゃあ質問を変えるが、肉の種類ならどの肉がいい？」

「もちろんカルビじゃないですか」

「馬鹿野郎！肉と言ったらヒツジだ。それもラムよりはマトンだな」
「自分、あのヒツジ独特の癖のある臭いだめですね」

「あの臭いがいいっていうのに、それじゃあだめだな。だからお前は俺の女の好みもろくにわかんないんだよ」

私はこれらの遣り取りを以って藤田を見限らねばならないと思つた。これまでナンパをしてきた時も、藤田は私のゲテ物趣味を解していなかつたので、彼は私のせめてもの役にも立たないのは重々承知だった。それでも藤田の私に対する情熱、とりわけ私がゲテ物を欲しようとする雄姿を見ていたいという彼なりの情熱が、私と藤田とのナンパにおける関係を辛うじて繋いできた。しかし、さすがに彼の焼肉の好みを聞いてしまった今となつては、もうどうすることもできない絶望に似た諦念が私の心に湧き出てくるのだった。

大脳生理学の権威、ロバート・バートン教授の学説によると、大脳にある性欲を司る機関と味覚を司る機関が非常に密接に関わり合っていて、片方の好みが似ていると、もう片方の好みも似ているこ

とが多いということである。味覚でもとりわけ焼肉の趣味が共通すると性生活の趣味はすべて共通すると言われており、もはや昨今では、焼肉の趣味が知られてしまうと、そのままベッドでのあり様も知られてしまうということ、知識人の間では焼肉はかなり敬遠されているくらいなのである。

つまり、私と藤田との間には、焼肉の趣味が違うということだけで大きな壁が立ちただかっているということになる。彼には私のゲテ物喰いなど分らないのだ。

それに私のヒツジ好きには、より深遠で個人的な問題も絡んでいるのを忘れるわけにはいかない。私はヒツジ肉の、あの一癖も二癖もある臭いを嗅ぐと、必ずと言っていいほど母の薔薇を思い出すのである。あるいは、より湿りけのある言い方をすれば、ヒツジ肉の独特な臭いは、私に生きる意味を、蓋し人生の大義と言うべきものを、思い出させてくれるのである。

第一節　～私の原体験～（後書き）

よろしければ感想をお願いします。

第二節　　拐かし　　（前書き）

私と藤田はもうくたくただった。あれから私も、みずから必死な勢いで女を探したのだったが、叶う女がなかないなかった。私たちはそこそこするうちに、いつの間にか日没を迎えようとしていた・

・
・
・

第二節　　拐かし

私と藤田はもうくたくただった。あれから私も、みずから必死な勢いで女を探したのだったが、叶う女がなかないなかった。私たちはそうこうするうちに、いつの間にか日没を迎えようとしていた。雪はしめやかに、なおも降り続いていた。気温が零下になっていないからか、地面に着地するとまもなく融けてばかりだった。それでも寒いことには変わらない。日暮れに近づいて、より一層寒くなつたようである。

「おい、藤田、今日はぜんぜんだめだな、いいのがない」

「そうですね」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

私たちは後に次ぐ言葉も出ないほど、疲れと、それに精神的な蹉跌により、挫かれていた。しかしこのままでは藤田に示しがつかない。私は残る力を振り絞ってセンター街を再度歩いてみようと考えた。

「おい、藤田、これが最後だ。やるぞ」

私はこう言つて、戦意を喪失している藤田を鼓舞した。日がかなり傾いて、雪が降りつづける厚い雲の合間から焼けた日光が射していた。私たちはちょうど沈みゆく日光に追いつがるように歩いて、相応しい女を探した。

そしてまもなく私はとある女に目を奪われた。と言うよりも私の内なる何かが、殆ど見えていない私をその女に惹きつけたかのようである。というのも、私の先にいる女は私から見ると逆光であり、目に見える女は赤黒くくすんでいたのである。

女はゲームセンターへと入って行った。私は藤田の袖を掴んで、なかば強いるように引き連れて見に行った。女はゲームセンターの入口付近のUFOキャッチャーのところ居て、ガラス張りの中に見える景品を食い入るように見ていた。それもガラス張りの円周を

辿って行ったり来たりしているので、その態はさながら捕えられた檻の中で右往左往する猛獣のようであった。

私は入口から五、六間ほど離れた所から遠巻きに女を調べた。その女は果たして私の理想に叶う、今まで追い求めていた型の女だったのである。

女は上下に白のスウェットを着ていた。その上にコートやダウンを着るわけでもなしに、パジャマのような安価なスウェット丸出しだった。そして真冬にもかかわらずビーチサンダルを履いていた。それほど近くから眺めているのではないが、ビーチサンダルの白い鼻緒が泥土にまみれたように薄黒く汚れているのが明らかだった。さらに一番奇異に思えるのが、両手にぶら下げた幾つもの紙袋やビニール袋である。おおよそ六つは携えているであろうか？各々の袋は今にもはち切れんばかりの丸みを帯びていた。

『この女は一体何ものであるうか？』こんな問いが私の胸中に飛び込んできた。しかしそれより一步も二歩も進んだ問いやら、はたまた類推というものが、この時の私に働かなかつたのは、異常なことだと言うべきか？私は単純にこの女に惹かれただけだった。そして今すぐ行動に移すべきであると考えたのである。

「おい、藤田、あいつだあいつ。かわいいだろ。ちょっと見てこいよ」

「えっ、どれですか？」

「そのUFOキャッチャーのところに突っ立ってるやつ！」

「あつ、あいつですか？」

藤田は指を指して私に確認を求めた。私は幾分仰け反った態勢のまま、自信に充ち溢れた様子で女を的確に指し示した。

「そうだ、あいつだよ。俺のタイプだ。おい、藤田、ちょっと近くに行つて見に行つて来てくれよ、偵察偵察！」

「あつ、はい、わかりました」

藤田は複雑な表情を湛えながら、ニツカポツカに手を突っ込んで例の女の所へと向かつて行つた。藤田の表情を看取つた私は、藤

田が弥増さる葛藤に苛まれているのがすぐ分かった。彼の葛藤とはおそらく、ついに私が狙うべき獲物を見つけ出したことによって、私の雄姿をもう間もなく目にする事ができるという喜びと、反面、予想を遙かに上まわる女のゲテ物ぶりを見て、自分の目利きに対して生まれた仮借ない失望との、間髪容れないせめぎ合いだろうと思われる。彼は、私の好みがこれほどまでのものだとは予想だにしていなかっただろう。何しろこの女は、今まで藤田とナンパを繰り返してきた時には全く現れなかったような稀有な型で、直截に言えばこのUFOキャッチャーの前で猛獣のように右往左往している女は、私の飛びきりのタイプなのであった。とは言え、私には藤田のそんな葛藤の様子を見て、特にいきり立つといったようなことはない。なぜならば私にとってこの女は、何の説明も理由もいらずに飛びきりのタイプであり、藤田が葛藤しているとするのも私のともすれば過剰な推測に過ぎないといえは過ぎなかったからである。

女に悟られないように近くで偵察していた藤田が戻ってきたが、その顔は失望を通り越して、ある種の空白感しかないようだった。私は藤田の様子など気にせず、だしぬけにこう言った。

「おい、藤田、どうだった？かわいかっただろ？」

すると藤田は、眉間に幾重もの皺を刻ませて、

「すごいですね」

とだけ言った。

「どうすごいんだ？」

「ええ、まあここからでもわかるじゃないですか……胸は結構ありましたよ……」

「おう、そうか、巨乳か、いいじゃないか」

「どうするんですか、行きますか？」

「当り前じゃないか！巨乳も好きだが、ああいう感じはけっこうタ
イプなんだよ」

藤田はどうやら言葉に詰まったようだった。そしてさらに眉間に皺を寄せるのだった。私は私で、藤田に関わっている余裕すらなくな

るほど、すでに女をかどわかそうとする考えに夢中になっていた。私は色好みの男に特有の、あのいかなる躊躇も赦されない峻厳たる意志で以って、女のもとに駆け寄って行った。

そして私は瞬きの間に、女にこう言った。

「よう、ねえちゃん、カラオケ行くぞ」

そう言うと同時に、がさつな私は既にして、女の手首を掴んでいた。そして私は近くのカラオケ店へと向かった、否、向っただろうと思われる。と言うのも、私にはそこから先の記憶が途切れているからである。もしかしたらカラオケ店へ行く前にコンビニやらファストフード店やらに行ったかも知れなかった。いくつか想像できるものはあるが、しかしそれも推測の範疇を超えない。しかし確かに記憶に残っているものがある。それは女の手首の感触である。女の白くはない手首は、手首という脂肪の付きにくい部位でありながら柔らかく、そしてなぜだかぬめるような感触を持っていたのである。．．

．．．

第二節〜拐かし〜(後書き)

よろしければ感想をお願いします。

第三節~~~~てんとう虫のサンバ!~~~~(前書き)

.....それから私の記憶が戻ったのはカラオケ店の個室の中である。部屋を見渡せば、藤田が入口付近に居り、私の真横には例の女が寒そうに体を震わせて座っていた。私は何をしていたのでか分からないまま、記憶を呼び戻すこともできないまま、さしあたり寒そうにしている女に声を掛けた.....

第三節くくてんとう虫のサンバ!くくく

・・・・・・・・それから私の記憶が戻ったのはカラオケ店の個室の中である。部屋を見渡せば、藤田が入口付近に居り、私の真横には例の女が寒そうに体を震わせて座っていた。私は何をしていただのか分からないまま、記憶を呼び戻すこともできないまま、さしあたり寒そうにしている女に声を掛けた。

「おい、寒そうだな。大丈夫か」

そう問いかけると女は、

「はい」

とだけ答えた。それも感情の動きがまるでない、塑像のような顔をしてである。とりあえずアルコールや食べ物を胃袋に入れたら温まるだろうと考えた私は、

「おい、なんか飲めよ、おごりだ、なんでもいいぞ」

「はい」

「ビールか?それともチューハイがいいか」

「レモンサワーでもいいですか?」

「おう、いいよ、なんでも。あとは食べ物もいいぞ、何か頼めよ」

「ええ」

「じゃあ適当に頼むからそれ食べていいぞ」

「ありがとうございます」

私は、視線をやや伏せて煙草を吸っている藤田に、

「おい、藤田、酒だ酒!レモンサワー一つに俺はビールな。藤田は何にするんだ?後は適当に頼んでいいぞ。それに食べ物も何でも頼め、おごりだおごり!」

と言った。藤田はわずかに顔をもたげて、

「まじっすか、リョーカイです」

と答えたが、彼はゲームセンターにいた時よりも心なしか険しい表情をしていた。藤田は私に対する埒のない畏敬の念を、この時を以

つて喪失してしまつたというのか？藤田のこうした常にない態度が、私の心の隅に一抹の不安を芽生えさせた。しかし私には、この傍らにいる女に理解を絶する魅力を感じている。さしてよく見たわけでもないこの女は、何らかの力で私を惹きつけて止まないのである。そんな私には、藤田の様子に気を取られて女への手を止める訳は一つもないのだった。

「おい、ところで名前なんて言うんだ」そう言って、私は女の素性を聞きはじめながら、さして委細に見ることのなかつた女の容姿を覗おうとした。女の顔は、のっぺりとした起伏のない顔立ちで、目は大きく凡てを飲みこむようだが、黒い瞳に輝きのないくすんだ印象を持つ目だった。

「あれ、名前さつき言いませんでした？わたし喜久子よ」

「ああ、そうだったっけ？わるいわるい、俺けっこう忘れやすいもんで」

私はつい、自分の記憶が飛んでいたことを忘れていたのである。私はそこで不吉な予感を抱いた。私にはしばしば記憶が飛んでしまうことが多々あったが、そのいずれの時も、生得の弄舌家としての本性をむき出しにしてしまつていたからである。後日、共にしていた友人などに聞けば、私は記憶がない中でありもしないことを縷々と話しているらしいのである。私はこの時、この喜久子という女に有らぬことを話していないか心配になつていた。とは言えそんな心配よりも、この女は遠目から見るとよりも一層、乳房が豊かなのであった。スウェットは胸の輪郭をおぼろにさせるが、それに負けじと布地を破つてその全容を現しそうな勢いである。のみならずスウェットの白が、うっすらと下着の茶褐色を透かして見せている。

そこへちょうどカラオケ店の店員が、失礼します、と入ってきて、アルコールと食べ物運んできた。ビールは私のもとへ、レモンサワーは女のもとへ、ウーロンハイは藤田のもとへ、それぞれ運ばれ、その他に鳥のナンコツ揚げとフライドポテト、そしてスナック盛り合わせがテーブルに置かれた。私たちは乾杯をして飲食いを始めた。

女はレモンサワーを一口飲むと、フライドポテトを凄まじい勢いで食べはじめた。よほど腹を空かせていたのだろう。食べ物を口一杯に詰め込んだ女の顔は、徐々に赤みを差しはじめていた。

「おい、今日は何してたんだ。渋谷の街を一人で歩いているなんて変わってんな」

私はそう言つて、テーブルの下に潜む女の足元を見た。ビーチサンダルの鼻緒だけでなく、サンダル全体が土埃にまみれていて、さらに足の指もくすんだ色をしていた。私はそれを見て、ようやくこの女が何者であるかが分かった。『この女は汚ギヤルなのだ！』しかし私にとって、その事実さはほど問題ではなかった。なぜなら私の眼前には惑わすような女の肉があったからである。

「はい、ちよつと……」

「まあ、なんでもいい」

私は徐々に女に対して性的な欲求を持ち始めていた。この時の私には、女の素性やあまり進まない会話などまるでどうでもよくなっていた。私は女をより感じようと、悟られないようにそのもとへと躍り寄った。

その時、突如として、私の頭の中で懐かしい音楽が流れ出した。

それは紛れもなくチェリツシュの「てんとう虫のサンバ」であった。

あなたとわたしとが夢の国　もりのちいさな教会で結婚
式を挙げました

藤田が歌っているのではない、私の頭の中でのみ流れている歌なのだ。『なぜ今この歌謡曲が私の中で流れる？私の耳朶にこびり付いて離れない、この安らぎの曲がなぜこの女に近づいて初めて……』

と同時に、私はこのスウェットの女の下から、あたかも湯気のように立ちのぼってくる強烈な臭気を目一杯吸い込んでしまっていたのだ。とすると、私はこの強烈な、人をなじるような強烈な臭気を嗅いだおかげで、頭の中でチェリツシュの「てんとう虫のサンバ」が流れたのだろう。

女の臭気と「てんとう虫のサンバ」……はいたって連関

がないように思われるが、それが私にとってすればあるいは当然だったとも言える。それも、少々奇怪な幼少期の記憶に遡ってみれば明快である。と言うのも、「てんとう虫のサンバ」は、今は亡き母のお気に入りの曲の一つでありいつも家で流れていて、幼い私は母の薔薇を嗅ぎながらこの曲を耳にしていたからで、仮に女の強烈な臭気が母の薔薇の臭いと近いものがあつたのなら、女の臭気によつて「てんとう虫のサンバ」を想起してもおかしくはなかつたからである。

実際、私は女の臭気を目一杯吸い込んで恍惚となつていた。母への憧憬がたちどころに生まれていた。私はまるで幼いころの夢のような生活へと戻つたかの錯覚さえ引き起こしていた。

女の臭気はおそらく森の茂みから生じているのだろう。それにしても母の薔薇の臭いとよく似ていた。蓋し母の薔薇よりも私を魅するものなのかもしれない……

私は組んでいた腕を組みなおしてこう言った。

「おい、藤田、なんか歌えよ。あれ、エグザイルでいいから、な！」
振り向きざまに私は藤田にこう言ったが、よく見ると、藤田はさらに険しい顔付きをしていた。それは険しいというよりも、むしろ何かに脅かされているような恐懼の表情だった。一度、藤田はその恐れ慄いた目で、私に何らかの目くばせをした。しかしそれも一瞬で、藤田は俯いて近くにあつた歌本を眺めはじめた。

カラオケボックスの中は藤田の歌声で鳴り響いていただろうが、私にはほとんど聞こえなかつた。なぜなら私の中ではチェリッシュの「てんとう虫のサンバ」が依然として鳴り響いていたし、女の体の生々しい夢想が脳裏にちらついて離れなかつたからである。

私はついに堪えられなくて女にこう言ってしまった。

「頼む、チチ舐めさせてくれ」

そう言うと、女は何の抵抗もせず上のスウェットを脱ごうとした。すかさず私は、

「喜久子、全部脱ぐな！首のところまで止めておけ、そうじゃないとエロくない！」

と喜久子を戒めた。従順な喜久子は私の言うことを聞いてくれた。私は安心して下着の留め金をやさしく外した。すると、開顕されたのは、実り豊かな双つの房と、その絶頂にお御座しまする双つのもどす黒い木苺であった。

私は、木苺の色合いや大きなかさぶたのような形状から、この女は子供を少なからず一人は生んでいる、と確信した。色好みの私にとつても、こういう類の女は初めてである。私はいよいよ募る好奇心と欲望から、半ば反射的に木苺に向かっていた。

私は木苺を口に含んだ。眇めに女を見上げてみた。私が我を忘れて木苺を食べているというのに、女は白い砂のような顔をして黙々とナンコツ揚げを食べている。私は木苺を口の中で転がした。思っていたよりもその実は硬く、しかし滑らかに口腔を漂った。また、女の森の茂みは、ノスタルジックな臭いを立ちのぼらせていて、私は舌先でどす黒い木苺を愉しみ、且つ感じやすい鼻でその臭いを隈なく追っていた。女はときに、咀嚼するナンコツ揚げの肉汁を私の頭や顔に滴らせた。

女の臭気に郷愁を感じて此の方、私の本望は、森の茂みに隠された花びらとその奥に秘匿された実を嗅ぐということであるのと言うまでもなく、木苺を嗜むことはほんのささやかな儀式に他ならなかった筈だったが、今の私といたらどうしたことだろう？私は無我夢中で木苺を愉しんでいたのであった。そうして飽き足らず口元の感触に耽溺していると、ふと私は、このどす黒い、大きなかさぶたのような木苺が、幼少のころよく口にしていた物体ととても似ていることに気づいた。それは発見であった。私は偉大な発見をしたのだ。私はその感動を誰かに伝えたくてままならない発作を覚えた。私は木苺をいったん口から離して、振り向きざまにこう叫んだ。

「おい、藤田、この乳首ビー玉みたいでうまいぞ。ビー玉だ、ビー玉！」

藤田は入口に近い隅っこでマイクを片手に歌っていて、私の感動の叫びなどつゆほども聴こえないようだった。歌いながらも依然として恐？の表情である。

「おい、藤田、この乳首ビー玉だ。ビー玉みたいでうまいぞ。ビー玉だ、ビー玉！」

藤田は私の声が聞えたようで、マイクは口元においたままこちらを一瞥した。しかし私の顔を見たときとたんさらに恐れの色を深めて、逃げるように視線をカラオケの画面の方へそらすのだった。

「ちえ、あいつはなんであんなにビビってるんだ。どうしようもねえな。とにかくこれはビ 玉みたいでうまいんだ、ビ 玉だ、ビ 玉、へへっ。」

第三節~~~~てんとつ虫のサンバ!~~~~(後書き)

よろしければ感想をお願いします。

第四節　　ナンコツ揚げ　　（前書き）

私は女のどす黒い大きなかさぶたのような木苺を貪りつづけ、女は片や私の不徳な施しにもお構いなしでナンコツ揚げなどを食べ続ける．．．．．そういう奇異な図式は時も忘れて長く続いたと思われる。そうになると好色漢の私には願ってもない時の停滞だが、この喜久子という女の方にはいささかの不都合が出てくるのである。私は木苺から一度口を離して、テーブルを見てみた。すると案の定、食べ物を入れた容器がすべて空になっていたのである。私は女の油まみれの唇を見ながらこう言った．．．．．

第四節　　ナンコツ揚げ

私は女のどす黒い大きなかさぶたのような木苺を貪りつづけ、女は片や私の不徳な施しにもお構いなしでナンコツ揚げなどを食べ続ける……そういう奇異な図式は時も忘れて長く続いたと思われる。そうなる好色漢の私には願ってもない時の停滞だが、この喜久子という女の方にはいささかの不都合が出てくるのである。

私は木苺から一度口を離して、テーブルを見てみた。すると案の定、食べ物を入れた容器がすべて空になっていたのである。私は女の油まみれの唇を見ながらこう言った。

「おい、キクちゃん、もつと食べるか？俺のおごりだぞ、おごり！」
「えつ、いいんですか？」

「ああ、いいぞいいぞ、俺のおごりだ！好きなもの勝手に選べ。……おい、藤田、キクちゃんがなんか食べたいって言うから聞いてやれ！」

藤田はこの時も私の忠告を守り、一人で歌い続けていたようであるが、私の声は藤田に一発で通った。藤田の表情は依然として何かに脅えている表情だった。女はさすがにはだけた胸を腕で覆いながら、しかし明瞭な声音で、

「えっと、鳥のナンコツ揚げ、五つお願いします」

と言った。藤田は否が応にも見てしまう女のありのままの姿に、恥らいよりも恐怖を感じたようだった。藤田は耳を疑った。

「ナンコツ揚げ五つ？」

「はい、お願いします」

女の食欲にさすがに驚いた私は、しかし冷静に、

「おう、食べるじゃないか、いいぞ」

と女の耳元で囁いた。

この時、私には奸智に長けたある考えが萌芽していた。それというのも、喜久子の眼前に再び栄養価の高い食事が運ばれば、日頃

るくな食事にすら在り付けていなそうなこの臭気を放つ女は、さながら牛馬の如くナンコツ揚げを食べはじめ、その間私がこの豊満な女に対してまた不徳な施しをしても、目を瞑ってくれるだろうと考えたからである。それも五皿とくればそれなりの見返りも期待できよう。私はついに本望を遂げる時が来たかと思った。頭の中ではチエリツシユの「てんと虫のサンバ」がよりいっそうその音色を強めて鳴るようだった。

ナンコツ揚げが届くと、そのすべての皿は女の前に置かれた。女はさっそく食べようとしたが、私は逸る女の肩を掴んでこう言った。「ちよつと待て、上のスウェット着ていいぞ」

どす黒い木苺の女は私の言う通りにしなかった。おそらく女は、私の目論見をちよつど反対側から捉えていて、私から自分の木苺を取ってしまうと、今まさに湯気を上げていている揚げたてのナンコツ揚げがお預けになってしまふ、と考えたのだろう。女は何も言わなかったが、自ずから木苺を私の方へ近づけてきた。

「おい、いいからもう上のスウェットを着てくれ。」

私はやや冷酷な口調で女にそう言った。すると女は少し寂しそうな表情をして、しびしび上のスウェットを被った。

……私はそれから次の一句を口に出すのを躊躇わざるを得なかった。それもそのはず、私はついに長年追い求めてきたもの、それも子供の頃に母を亡くしてから絶えず希求してきたもの、ありつけようかとしていたからである。今もなお、女の茂みの辺りからは安寧へと私を連れていく臭いが深く立ち籠め湧き上がっている。とはいえ私は、憧憬を抱かざるを得ない臭いが、確実にその密林から湧出しているかどうかを、未だこの目と鼻で直に確かめたわけではないし、もしかすると、望まれて顕現する茂みとその内に秘匿された実をいざ目の前にすると、私がそれに安寧だの憧憬だのノスタルジックだのという母に纏わる感情を抱き得ない可能性も無きにしても非ずだった。それだからこの瞬間の私には、いよいよ募る大きな

期待に織り交じって、おどろおどろしい不安があった。しかしいつまでも躊躇ってはかりはいられない。私はこの中空に擲たれたようなしぼしの時の停滞に、いくらか墮ちていく快感のようなものも感じたが、気を取り直し我に戻ると、一刀両断にこう言っただけだ。

「おい、下のスウェットを脱げ。上のスウェットの代わりに下のスウェットを脱げ！」

女は一瞬戸惑ったように見え、また快く肯じたようにも見えた。そしてこう答えた。

「はい、わかりました」

女はそう言つと、あたかも糸が解けていくように何の抵抗もなしに下のスウェットを脱いだ。そしてそれを勢いよく部屋の片隅に投げると、丁度そこにあつたはち切れんばかりに膨らんだ女の手提げ袋の山に見事に乗つかった。

「そしたらおパンティーもな」

「はい、わかりました」

女の声は実に透き通つていた。というよりは何の感情の纏綿もない、無色の声と言つたほうがより忠実だろうか。そしてまた、戸惑っているようにも、快く諾っているようにも見える。

それにしても、女は私の奇怪な指示に対して何を思っているのだろうか。それはおそらく、下半身を露骨にすることの羞恥や躊躇いだけではないだろう。かといって自らの下半身と引き換えに鳥のナコンツ揚げをたらふく食べられる喜び、それを鑑みても彼女の迷惑は殆ど説明できないようだった。そうなると、考えられることは反対に一つに限られてくる。つまりこの、一人は子供を産んだことのある薄汚い女は、流れる雲水のような女であつて、私が要求することに基本的に感情を抱かない、いわば原始的な女の雛型なのだろう。この女は個性の無さ、性格の無さ、芯の無さにおいて著しく、ときに感情的になることはあつてもそれは一時の気紛れ、または感情の発声練習のようなものであつて、私感もなければ考えもなく、あまり意味を成していない。彼女が何らかの考えを述べる時、それはこ

れまでに覚え知った何種類かのアイデアの一つ一つをその場に合わせ
て適当に引き出しているだけで、自分で考えることを知らない種の
女なのである。そして原始的な女であることに、好意ある男に対し
てはめっぽう従順なのだ。おそらくこの喜久子という女は、私に少
なからず好意を抱いていて、私が指示することを感情や思考のフィ
ルターに通さずにそのまま体現してしまうのだろう。この女の声が
何の感情も含まず、戸惑っているようにも快く肯じているようにも
見えるのは、女がおそらくそういった型の女であることに起因して
いるのだ。

第四節 ～ ナンコツ揚げ ～ (後書き)

よろしければ感想をお願いします。

第五節　カインの末裔（前書き）

花模様のレースのついた、濃い肌色の、布地が細くて今にも千切れそうなの、しかして十分に森の茂みを隠していた下着は、女のしめやかな脱衣を経て、部屋の隅へと擲られた。部屋の隅で、花柄の下着は惨めなくらい小さくなっていて、まるで蝉の抜け殻のように虚ろに見えた。無論、下着には生命など宿っている訳ではないのだが、女によつて装着されていたその時までには、肌色の下着は、今にもはち切れんばかりに肥えた女の太腿の一部のように見えていたのだ。た．．．．．

第五節　カインの末裔

花模様のレースのついた、濃い肌色の、布地が細くて今にも千切れそうな、しかして十分に森の茂みを隠していた下着は、女のしめやかな脱衣を経て、部屋の隅へと擲たれた。部屋の隅で、花柄の下着は惨めなくらい小さくなっていて、まるで蝉の抜け殻のように虚ろに見えた。無論、下着には生命など宿っている訳ではないのだが、女によって装着されていたその時までには、肌色の下着は、今にもはち切れんばかりに肥えた女の太腿の一部のように見えていたのだ。た。

女が下着を脱いだその時から、私の鋭敏な鼻腔は懐かしいような臭気をより感じ取った。しかし私の視線はまだ上方を漂っている。私はおそろおそろその視線を森の茂みの方へと下ろした。

まず私の目を捕えて離さなかったのは……鬱蒼として寂寞たる森の茂み……ではない。私の目は、女の白くはない太腿にいくつか点綴するおぞましいほどの黒い染み……を睜ったのだ。それは明らかにダニに食われた跡だったのである。

私は寒気を感じた。しかしその寒気は一瞬にして消え去った。というのも私は、おぞましいとすら感じた女のその黒い染みが、ゆくゆく何か尊大なものに見えてきたからであった。

『この女はカインの裔の子であろうか？』私の頭には、こんな突飛な夢想が座を占めた。

『この女の太腿に散在する黒い染み、野に舞う黒胡蝶の群衆のような黒点、これはもしかやハウェ神がカインに与えたしるしと同じものではないだろうか？この薄汚い女は日本人であろうが、ヤハウェ神はともすると、はるばる辺境にあるこの日本国に、カインの血を引き継ぐ子を、幾世代をもまたいで密かにお連れになっていたのではないだろうか？』

カインは弟アベルを殺した咎により地のおもてから追放された

が、ヤハウエ神は彼を見放しはしなかった。カインは地上を放浪するあいだに出会う人から殺されると考えていたが、ヤハウエ神は、カインを殺す者があつたら、その七倍の復讐を受けなければならぬ、とした。またヤハウエ神は、カインを見つけた者が彼を打ち殺さないように、一つのしるしをカインにお与えになった。こうしてカインは、ヤハウエの顔の前から去ることにはなったが、アベル殺しの咎により自らも死ぬことを免れた。そしてカインは後に妻を知り、子孫を残したが、その子孫の一人であるレメクは、カインよりもさらに恵まれた待遇にあつた。レメクはその妻らに言った。「カインのための復讐が七倍だとすれば、レメクのためのは七十七倍！」と。

『裔にいけばいくほど復讐が増すとすれば、裔の裔に当たるであろうこの白スウェット女のための復讐は、おおよそ七千七百七十七万七千七百七十七倍だろうか！ああ、なんと尊大で恵まれた神の子であろうか？彼女に危害を加えるようなことがあるとしたら、私は桁外れの復讐を受けなければならないのだ。しかしそれもこの私には杞憂である。彼女がカインの末裔であろうことは、私にとって喜ばしいかぎりであり、なぜならば私は彼女と夫婦の契りを結ぶべく、あるいは母と子の契りを結ぶべく間柄となるからである。』

……そんな戯けた夢想は、しばらくすると立ち消えた。視線を落とした私の目のまえには、凝然として、白くはない女の太腿と、その太腿に点綴する黒い染みがあるだけだった。その黒い染みは、心ならずも尊大な印象を失ってしまったが、しかしおぞましいといった印象も無くなっていた。私の視線の先にあるのは、まさに害もなければ易もない、黒胡蝶の無意味な舞いでしかなかったのである。

果たして私は、女のダニに食われた跡から解き放たれて、ようやく繁茂する森の茂みへと視線を動かしたのだった。私はこの瞬間をどれほど心待ちにしていた

かお分かりだろうか？私の鼓動は先よりも荒々しく胸の内を打ち、

緊張が体全体に拡がった。が、湧き上がる強烈な臭気は私を和ませた。それは不思議な感覚だった。

私は森の茂みへと分け入る前に、頭をもたげて女の顔を一瞥した。女の顔は目映い光に埋もれていて、よく見えなかった。強い光が顔のどこかから放たれているのだが、その源はどうやら彼女の唇のようである。女は絶えず鳥のナンコツ揚げを食べ続けているようで、その滴る油が彼女の唇をよりいっそう輝かせていたのだ。さらに、天井のスポットライトの光が女の唇に反射して、ちょうど私の目元を照らしているのだった。

私は照りかえす光をかわして女の顔を見た。女はやはり戸惑っているようにも、快く出迎えているようにも見える。ふと、テーブルの上を見ると鳥のナンコツ揚げは四皿目に突入していた。もはや一刻を争う事態ではないか！私は心を決めて、虚ろな顔の女にこう言った。

「おい、キクちゃん、下も舐めさせてくれ、どうだ？」

薄汚い女は何も言わず、ナンコツ揚げを一つ、口に放り込んだ。顔色一つ変えなかった。今度は大きめのナンコツ揚げをパクリと。そして咀嚼し終えたところで、女はそれと分らないくらい曖昧な首肯をした。

「おい、本当にいいのか、キクちゃん？」

女は四五個だまになっているナンコツ揚げを口に運んで、嚥下しないままに下品な口を開いて、

「はい、別にいいですよ」

と言った。その言いようは、吹く風が砂の表面をさらっていくような軽やかさだった。

私は弥増さる鼓動を抑えようとするかのように、生唾を二度ほど飲み込んだが、それも糠に釘である。私はもはや不安と歓喜と憧憬などといった様々な感情により、前後不覚に陥りそうだった。それもそのはずである。私は今まさに、長い間探し求めてきた薔薇とその臭いを、母を腸チフスで亡くして以来ずっと希求してきた郷愁の

臭いを、この手に確かなものとしようとしていたからである。のみならず、チェリッシュの「てんとう虫のサンバ」が私の頭の中で徐々にヒートアップしはじめていたのだ。

照れてゝるあなたにゝ虫たちが　口づけせゝよとはやしたて
そつとあなたはくれましたゝ

私はついに意を決して、女とテーブルとの狭隘な間隙にすり入り込んだ。果たして私の頭は、薄汚い女の広げた両膝に挟まれた。すると、先よりも鬱蒼たる森の茂みに近づいた私の鼻腔は、さらに強烈な臭いを感じ取った。のみならず、茂みにはもわもわと温気すら立ち籠めていているようで、それは私の目に染み入る。

目に染み入る感覚……。これは懐かしい感覚だった。

私が小学五年の、蒸し暑いある夏の一日、母が亡くなる少し前の日である。その日は幼い私が母の薔薇を最後に嗅いだ日でもある。私は今でも生々しく覚えているが、あの日の母の薔薇はとても蒸れていた。エアコンがなく、扇風機一台でまかっている居間の片隅で、母は座布団を畳の上に敷いて、惜しげもなく私に薔薇の一群を披いてくれたのだったが、その魅惑の薔薇からは、夏の蒸し暑さによって蜻蛉が立ち昇っていた。幼い私はその蜻蛉をまともに喰らって、かゆくなつた目を擦り、それでもなお恍惚となるのだった。あ

の当時のかゆいと感じた感覚は、まさに今、薄汚い女の膝と膝の間に頭を入れて忽ち目に染み入つたと感じた感覚と同じだったのである。その上、私の記憶のかぎりでは、死に際の母の、蒸れた薔薇が、物心ついてから私が長らく嗅いできた臭いの中で、一等恍惚をさそつたのである。するとこの女は、こんな雪の降る寒い日に、スウェット一枚で体を震わせていたのにもかかわらず、膝と膝の間にするりと入り込んだ私の、よく利く鼻を前にして、最後の母を凌ぐほどの蜻蛉を立ち昇らせているとすると、いったい私にとって何者に値するのだろうか？

私と母には強い血の繋がりがあつた。しかしこの女にはまったく血の繋がりがあつた。仮に私に独特の性癖があつたとしても、私は母の

髪をいじる癖を引き継ぎ、母の手料理に愛着を持ち、母の手の温もりに安心を感じる。私にとって母は郷里であり聖なる子宮である。しかしこの女は悉く赤の他人である。この女の身体的、あるいは精神的特徴というものが私と何らかの関わりを持つはずがない。彼女のやや横に間延びした体付きが、彼女のときおり見せる没個性的で自墮落な態度が、性差を含みに入れても、意識の外側で私を恍惚や安寧へと惹きこむはずがないのである。あるべきは動物的な性的欲求のみのはずである。

第五節　カインの末裔（後書き）

よろしければ感想をお願いします。

第六節　善悪の知恵の樹の実　（前書き）

私はかゆい目をこすった。こすればこするほど、朦々と立ちのぼる温気が余計目に染みた。まばたきを幾つかしてみた。すると、瞳の潤いでようやく目を開けていられるようになった。私の視界は広闊にひろがったが、迫りくるものは、黒胡蝶の舞う太腿と、鬱蒼と生い茂った真黒い森である。太腿はことさら肉感をともなうて私の顔を挟みこみそうであった……

第六節　善悪の知恵の樹の実

私はかゆい目をこすった。こすればこするほど、朦々と立ちのぼる温気が余計目に染みた。まばたきを幾つかしてみた。すると、瞳の潤いでようやく目を開けていられるようになった。私の視界は広闊にひろがったが、迫りくるものは、黒胡蝶の舞う太腿と、鬱蒼と生い茂った真黒い森である。太腿はことさら肉感をともなつて私の顔を挟みこみそつであつた。

この時にはもう、私の確信は揺るぎなかつた。母が亡くなつて以来、長らく抱いてきた願望を、今まさに果たすことができるという確信。私の体には、しだいに微細な汗が滲み出していた。緊張のためか、私の手は震えていた。その手を女の腿の上にのせる。震えが止まるように、がっしりと二つの腿を掴んだ。そして今まさに、私のよく利く鼻と繊細な口は、ごくゆっくりと森の茂みへと近づいていった。……

とその時、大きな拡張された叫び声が聞かれた。

「ダメーッ！伊藤さんダメーッ！」

私は驚いて、藤田の方をとっさに振り向いた。

「その女のシモの方には手を出しちゃダメなんです！」

「はっ？」

「その森の中はとても危険なんですよ！」

私は藤田が何を言っているのかわからなかつた。私はただちにこう言った。

「おい、藤田、とりあえずマイクを下げろ、マイクでしゃべる奴がどこにいる！」

藤田はさしあたり私に従つて、マイクをテーブルの上に置いた。よく見ると、藤田は興奮のためか肩を怒らせていた。額には大粒の汗をかいている。顔色は異常なほどに青白く、苦痛によつてか顔は見事に歪んでいる。藤田は女に声を掛けた時辺りから、常にはない様

子を見せていたが、時間が経つにつれて徐々に醜態をエスカレートさせているようである。そして今まさに、その醜態が絶頂に達したかのようでもあった。私は藤田のこの態度が実に気味悪かった。また、ようやく待ち焦がれていた行為に至ろうとしていたところを妨害されたことにより、怒りの感情すら込みあげてきた。

「おい、藤田、お前は何が言いたい？森の中が危険だっていうのはどういうことだ？」

「その女の森の茂みは、聖なる楽園なんです」

「はあ？さっぱり意味が分からん、さては藤田、この女のこと疑っているな」

「いえ、そんな失礼なこと言いませんよ。僕には分かるんですよ、キクさんの森は人間が立ち入るべき所ではないということを」

「もしや、藤田、お前……キクちゃんの密林の中は……
・・・アダムとイヴの楽園だと言いたいのか……お前の言い
そんなことだ」

「その通りですよ、だからその茂みには近づいてはいけません。ひとたび足を踏み入れることがあることなら……」

「善悪の知恵の樹の実……か？」

「その通りです。一度入ってしまったら、それを食べずにはいられないでしょうね、なにせ最初の人間であるアダムとイヴが食べてしまったほどですからね。どんな誘惑が待っているか分かりません。

ただ、キクさんの楽園の中に生えている樹が、善悪の知恵の樹であるかどうかは自分にも分らないのです。一本の樹であるかどうかもあやしい。おそらく樹ではなくて花ではないでしょうか？その花の核心にはある種のコリコリした突起があつて、それが善悪の知恵の樹の実に相当する……。自分としても、女性の森の茂みがアダムとイヴの楽園であるという事例は初めてですからなんと判断し兼ねますね。ただ、あの茂みに禁じられた食べ物があるとしたら、普通に考えてまず食用の花でしょう。それもおそらく薔薇とかその辺ですかね。しかしこれらはいくまでも推測ですよ」

「おい、藤田、まあ落ちつけよ。お前の言いたいことは分かる。しかしな、その考えは俺の目論見を木っ端微塵にするんだよ。なあ、藤田、あんまり俺を怖がらせるようなことは言わないでくれ」

「いえ、伊藤さん。これは一大事ですよ」

「俺が薔薇の核心を食べたら死ぬとでもいうのか？」

「そうなるかもしれませんが」

「おい、藤田、ばか言つな。と言うのもな、アダムとイヴは野の獣の中で一番狡猾な蛇の惑わしによって、善悪の知恵の樹の実を食べってしまったが、結局死にはしなかっただろう？だから大丈夫なんだよ、俺だって。死ぬなんていうのはヤハウエ神の脅しに過ぎないんだよ」

「仮に死ななかつたとしてもです。伊藤さんは楽園から追放されることになりますよ」

「お前はどっしりしようもないな。この俺が今現在、楽園に住んでいるとでも思っているのか？」

「はい、伊藤さんはとても楽しそうに生きてるじゃないですか」

「アホか！俺は楽園なんかに住んじやいねえ。俺は大衆世界にひっそりと住んでいるんだよ。俺は見ての通りこんなもんだ。わかつているだろう」

「伊藤さんのそついう謙虚なところ好きです……なんてそんなこと言ってる場合じゃありません。とにかく伊藤さんは生まれてからずっと楽園に住んでいるんですよ。たとえ伊藤さんにその自覚がなくともです。伊藤さんが大衆世界に住んでいると思つてるところはまさに楽園、つまりその楽園を追放されるんですから、伊藤さんの的には、大衆世界を追い出されて地獄のような世界に行かなければならなくなるのと同じことを意味しますよ」

「別に地獄へ追放されてもどつてことないよ。それにな、仮に俺が地獄に追放される身になつたとしてもだ。そのかわりになにか途轍もないものを得るんだからな。藤田はもちろん知ってるよな、アダムとイヴは善悪の知恵の樹の実を食べたことによって、その樹の

名の通り、善悪を分別する知恵を得た。それで二人の眼は開かれて無花果樹の葉を綴り合せて、前垂を作った。つまり善悪の知恵の一つである恥を知った、ということだな」

「いや、伊藤さん、アダムとイヴが禁じられた樹の実を食べたことによつて、それ以降のすべての人は善悪の知恵を持つているのですよ。ということとは、僕だつて伊藤さんだつて既に善悪の知恵を持つているということです。今さら神の御怒りを招くようなことをしたつて何の利益もありませんよ。結局樂園を追放されるだけです」

「それは違つただろう。確かに人は恥を知つて、裸のままに生活することはなくなつたが、知つたのは恥だけだろう。善悪の知恵のすべてを有していることはないよ。なぜなら人はそれ以降、数えきれないくらいの罪を犯してきたんだからな。アダムとイヴのすぐ後の頃だつて、ノアの洪水や、バベルの塔や、ソドムの滅亡などの話は、人々の罪深い行いに関係しているじゃないか。つまり禁じられた実を食べた当のアダムとイヴにしか、善悪の知恵を与えられていなかったんだよ」

「前例がどうであれです。僕たちは神を恐れなければならないんです。罪は罪です。キクちゃんの薔薇の核心はヤハウエ神が禁じられたもの。食べてはいけませんよ、絶対に。神を恐れ敬わなければ、いずれ罰が当たりますよ」

「ええい。うるさいうるさい！おい、藤田、ここに御座しまするキクちゃんは俺の飛びきりのタイプなんだ。そして単にタイプってだけではなくて、キクちゃんは俺に亡き母の面影をも感じさせてくれるんだよ。このことは俺にとってかなり重要なんだ。なにせ俺は、母への憧れに縋り続けることが、生きていく活力になつてるんだからな。キクちゃんは俺のその願望を叶えてくれる貴重な存在なんだ」

「ダメなものはダメなんですよ。いくら伊藤さんの中にキクさんを求める理由があつても、優先すべきは神のご意向です。理屈がどうのこうのあつても、僕らは単純に神を恐れ、単純に神に従うべきなのです」

失礼しまゝす。

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

「鳥のナンコツ揚げ五つ、お待たせいたしました」

「はい、どうも」

「では、失礼しまゝす」

私と藤田が二人で、高等なのか下劣なのかわからないが、激しい口論をかわしている間、この薄汚い女は二度目のナンコツ揚げを平らげ、再度ナンコツ揚げを注文していたのである。はじめの注文も合わせると、この女はフライドポテトにスナック盛り合わせを一皿ずつ、それにナンコツ揚げは十一皿をほとんど一人で食べることになる。

私と藤田は激しい口論など忘れて、思わず顔を見合わせた。私に映る藤田の顔はたえて変わっていなかった。むしろ顔の蒼白さや歪み、額の大粒の汗といった苦痛の表情に加えて、瞳には絶望的に暗い充血がみられた。翻って藤田に映る私の顔はどうだっただろう？私の顔はここに至って清々しく晴れやかな表情を湛えただろうと思われ。なぜならば私は、藤田のいささかにも迷信的と思える考え方に動揺していたが、女がナンコツ揚げをさらに注文したことで、私の企みを後押しする力を感じたからである。あるいは藤田の発想を借りて付け足すなら、神は私を、多くの民を束ねる族長として認め、私の個人的であるがいずれば公の為になるであろう多少の罪悪を、けだし勧めているのだ。

第六節　善悪の知恵の樹の実　（後書き）

よろしければ感想をお願いします。

第七節　楽園喪失　（前書き）

私は立ちあがっている女を元の場所へと座らせ、運ばれてきたナン
コツ揚げを女の目の前においた。女はいつしか下のスウェットを履
きなおしていたが、自ら脱いで再び部屋の隅に擲った。女は明らか
に、鳥のナンコツ揚げを引きかえにして、私の要求を歓迎していた
のである……

第七節　楽園喪失

私は立ちあがっている女を元の場所へと座らせ、運ばれてきたナンコツ揚げを女の目の前においた。女はいっしか下のスウェットを履きなおしていたが、自ら脱いで再び部屋の隅に擲った。女は明らかに、鳥のナンコツ揚げを引きかえにして、私の要求を歓迎していたのである。

とは言っても、この女は私と藤田の口論をどんな心持で聞いていたのであるのか？今に見る女の顔は、依然として感情のいくつかが欠けているようである。何の感情のよるめきもない。しかし私は気がかりになってこう聞いてみた。

「おい、キクちゃん、今さっきの俺たちの話聞いてたよな？」

「はい、二人ともなんか熱くなってきましたね、だけど何言っているかよく……。私の話ですか？……。それにしても御馳走さまです。勝手に注文しちゃって。鳥のナンコツ揚げってホントおいしいですよね」

「ああ、どんどん食えよ。おごりだからな、おごり！」

これで安心した私は、女の両肩を持って半ば強引にソファに押し倒した。女は急な力に驚いて、酒焼けした年増の女のような声で小さくキヤツ、と言った。私は今度こそは楽な態勢を築いて、事に挑もうとしたのである。

私は薄汚い女の暴露された下半身の、分けても膝頭を手で開いて、森の茂みを悉く見た。明るみに出ているためか、その奥底に微かな薔薇の花びらが咲いているのがわかった。今は亡き母の臭いを類推させる、否、それを凌ぐほどの臭気が私の鼻を突く。私は今こそ果たさなければならぬと思った。……

しかし、私は喜久子の森の茂みに分け入ろうとしても、そうすることができなかった。私の体はなぜだか言うことを聞かず、頑なだった。より早まる鼓動が、体の内部で鳴り響いて不愉快である。腋

の下にはじつとりと嫌な汗が湧き出ているのが分かる。

それは確かに死への脅えだった。私はややもすると、藤田の迷信的な考え方に傾いていたのである。女がいくら私を後押ししてくれようとも、それは私の単なるその場しのぎの自己正当化でしかなかったのである。そして完全に否定しかねる死の蓋然性には脅えるほかないのだった。とはいえ、私の根源的な願いも覆ることはない。その明快な証左として、何度も言うようだが、私の頭の中ではチエリツシュの「てんとう虫のサンバ」が、この時も絶えず流れていたからである。それもファンタスティックな楽調は、ついに絶頂を迎えようとしていたのだ。

あゝかあゝおきいろのゝゝ衣装をつゝけたゝゝてゝんとゝ虫がゝしゃしゃり出て　サゝンバに合わせてゝゝ踊りだすゝゝ

つまりこの時の私は、根源的な欲求と死への脅えとの板挟みにあつた。鬱蒼とした密林を目の前にして、私は何度と根源的な欲求を断念しようとしたことか！もつともそれもできるはずがない。できることと言えば、密林の前で固まっていることだけである。不敵なほどの鼓動が、耳の内側から鼓膜を打ち破りそうである。衣服と体の間に誰かが潜んでいるかのように、火照りが異常である。刹那に襲ってきた極度の緊張は、しだいに私の神経を蝕みはじめた。そして私はいつしか意識を失っていた。……

「イト……サン……イトウ……さん……
……伊藤

さん！伊藤さん、大丈夫ですか？」

「……ああ？……ああ、どうした藤田？」

「よかったあ、生きてたんですね、伊藤さん！僕はつきり……
……」

「まあ、生きてるだろうな……こうして話してるってことは……」

すると藤田は、急な勢いで私を抱き起こした。

「むむ、俺は寝ていた……しかも……むむ？」
「うつ伏せで」

「顔に笹の葉のようなものが付いてる……」

「茂みの上で寝ていましたからね」

「蜜のような粘性の強い液体も……」

「むしろ花びらの上でしたからね」

「舌がひりひりする……ぞ……」

「舌を動かしていましたからね」

「もしや……俺は……」

体には衝撃が走った。それはたちまちに強い倦怠感をともなう衝撃だった。私は自分の手で体のいたる所を触った。膝、太腿、腹部、胸、肩、首、そして顔を隈なく。手に確かな感触を確かめたのち、私は藤田にこう叫んだ。

「どうして止めなかった！」

「僕は何度も止めましたよ！」

「嘘をつけ！」

「何度も声に出して止めましたよ！しまいにはマイクを使って……」

「……それでも伊藤さんはうんともすんとも言いませんでした」

「バカ野郎！一刻を争う事態なのはお前のほうが分かってたじゃないか！それこそ揺すぶるなり叩くなりしてくれよ！」

「……」

私は興奮した野猪のような格好で、瞬時に女の方を振り返った。女はソファに寝そべりながら、相も変わらずテーブルに手をのばしてナンコツ揚げを食べている。その顔はすでに良識ある人間を通り越して、むしろ白痴に近かった。私は女の顔を深く覗き込んでこう言った。

「おい、キクちゃん。俺もしかして……なあ？」

「はい！もう一度されるのでしたら……できればあと五皿
お願いできますう？」

私は藤田を押しつけて荒々しく部屋を出た。それからなりふり構わず走った。カラオケ店を出て、すっかり日も暮れた渋谷の街を当てもなく走った。しかし私はどこへ行こうとしていたのだろう。それは当の私にも分らなかつた。とにかく真冬の寒さの中、しめやかに降る雪を体いっぱいを受けて、私は力の赦すかぎり走った。ひとえに姿形のない死というものから逃れるかのように。

渋谷の繁華街を抜けたところで、ついに私は力尽きた。私は閑静な住宅地のとある路地で、一度ニツカポツカの膝に手をつけて肩で呼吸を繰り返した。ふと背後が怖くなつて後ろを振り返つたが、何も追ってくる気配はない。しかしいつまでも休んでいてはならないような気がした。私はもしかすると禁断の果実の実を食べたことにより、死なねばならなくなると考えたからだ。そうとなれば逃げるほかない。私は再び走り出した。

死に脅えて走っていたが、尤も私の頭の中はある種の恍惚状態にあつた。死の観念と同時に、私は幼少期に戻つたかのような錯覚を抱いた。私は死から逃れるように走り、且つ生前の母の幻影に追いつめるように走った。それはほとんど追いついたようだった。

私はこのまま走り続けられると思つた。その時私の舌はピリリと痺れた。

~~~~~  
完  
~~~~~

第七節　～楽園喪失～（後書き）

最後まで読んでいただき、本当にありがとうございます。
よろしければ感想をお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3000o/>

パロイディア・パラフィリア

2010年10月28日05時37分発行